**会議の概要**

|  |  |
| --- | --- |
| 名称 | 平成26年度　第１回神奈川県がん教育協議会 |
| 目的 | 神奈川県におけるがん教育を専門的技術的観点から協議する |
| 開催日時 | 平成26年10月７日（火）15時～17時 |
| 開催場所 | 横浜情報文化センター |
| （役職名）  出席者 | （◎：座長、○：副座長）  ◎中川恵一（東京大学医学部附属病院放射線科　准教授）  　片山佳代子（神奈川県立がんセンター臨床研究所　主任研究員）  　緒方真子（神奈川県立がんセンター患者会「コスモス」　世話人代表）  　角野禎子(公益社団法人神奈川県医師会　理事)  　石渡篤美（神奈川県公立中学校長会　顧問）  　奥山郁子（神奈川県学校保健連合会養護教諭部会　部会長）  　遠藤泰子（神奈川県ＰＴＡ協議会　執行役員）  　遠藤仁一（神奈川県教育委員会教育局支援部子ども教育支援課　課長）  　　※代理：上田尚弘（同課　副課長）  　南雲正二（神奈川県県民局次世代育成部私学振興課　課長）  　　※代理：齊藤朋子（同課　教育指導主任）  　佐々木つぐ巳（神奈川県保健福祉局保健医療部がん対策課　課長）  ○田中不二夫（神奈川県教育委員会教育局指導部保健体育課　課長） |

【概要】

**１　開会**

**２　座長の選出**

（事務局）

　　協議会設置要綱第４条では、座長は委員の互選により選出し、副座長は座長が指名す　　ることとされている。座長の選出をお願いしたいと思うが、まず、委員の皆様から座長　　の指名について、ご意見をいただきたい。

（佐々木委員）

　　中川先生が適任と思いますが、皆さんいかがでしょうか。

（全委員）

　　意義なし。

（中川座長）

　　日本は世界一がんが多い。一生のうちに２人に１人はがんになると言われている　　　　が、最新のデータでは男性が60％、女性が45％である。2008年では男性58％、女性　　43％、つまり１年で１％ずつ増えている。2014年には男性64％となり、あと２年で　　　男性３人に２人となる。やはりがんのことを知っておく必要があるし、今の子どもたち　　にとってはもっと必要である。しかし実はあまり知られていないが、今がん死亡が37　　万人で、戦前から増え続けている。先進国の中でがん死亡が増えている国は日本だけで　　ある。その根底に国民ががんのことを知らない、知ることができなかったということが　　ある。私の世代もだが、若い世代でもがん教育は事実上なかった。それがこのような形　　で、日本でも先駆けて、本県が体制を整えて、がん教育を目指すということは素晴らし　　いことである。

　　では、協議会の設置要綱の第４条において、副座長は座長が指名するとされているの　　で、学校教育に精通している田中委員にお願いしたい。

（全委員）

　　意義なし。

**３　平成26年度神奈川県がん教育について**

**（１）これまでの経過報告**

　　　事務局が資料１に基づき説明

（佐々木委員）

　　補足として、今年の８月30日にパシフィコ横浜で開催された第52回日本がん治療　　学会学術集会において、児童生徒に対するがん教育の立ち上げのストラテジーとして、　　本県におけるがん教育の取組みについて発表した。立ち上げから現在に至る経緯、今後　　の予定などを報告させていただいた。その中で、当日発表したパワーポイントについて、　　公開してはどうかというご提案があり、現在神奈川県のホームページ「かながわのがん　　対策」で神奈川県の取組みとして「神奈川県のがん教育」という項目があり、ここに掲　　載している。ぜひご覧いただきたい。

（中川座長）

　　日本がん治療学会は日本で最も大きな学会だが、とても良いプレゼンであった。皆　　さんもぜひお目通りいただきたい。今の説明の中で少しわかりにくいのは、資料１の「が　　ん教育に関する検討委員会」は（財）日本学校保健会という外郭団体の中でやっていた　　ものを、今年度は文部科学省の本体の中でやっていくということである。本年２月に出　　た（財）日本学校保健会からの報告書はよくまとまっているし、その内容が本県にも具　　体的に引き継がれている。

**（２）文部科学省がんの教育総合支援事業について**

　　　事務局が資料２に基づき説明

（中川座長）

　　昨年の（財）日本学校保健会の中でも文部科学省主体で報告書ができたので、基本的　　な考え方は（財）日本学校保健会のものから大きく逸脱することはないと思われる。従　　って、がんを知ることにより命の大切さに気づくという流れになっていくだろう。これ　　は学習指導要領の改訂を伴うことになるだろうと思われるが、現段階では、がん教育は　　あくまでもモデル的な授業になるという制約がある。とりわけ、今の学習指導要領の中　　では、がんという病気が生活習慣病の中に入っているが、これは一部のがん患者から　　見ると少し違うところがある。このあたりががんに対する誤解や、場合によってはが　　ん患者への差別ということにつながる。

**（３）平成26年度　神奈川県がん教育モデル授業について**

　　　事務局が資料３、４に基づき説明

**（４）パワーポイント教材と補助資料について**

　　　事務局が資料５に基づき説明

<質疑>

（片山委員）

　　以前から教員をサポートするような副読本を作ってほしいと申し上げていたが、今日　　パワーポイントを初めて拝見させていただき、よく出来ていると感じた。ただ３点ほど　　申し上げたい。

　　まず１点目は、中学生を対象とするということで、ひらがなの「がん」と漢字の「癌」　　の違いというような基本的なことも知りたいのではないかと思う。先生方の中でも「が　　ん」と「癌」をどのように区別しているのかをご存知ない方も多くいらっしゃるので　　　はないかと思うので、そういった豆知識のようなところも、スライドには入れないに　　しても、教授用補助資料の中には入れていただいて、生徒がもしこのような基本的な質　　問で興味を持った時に、即座に答えられるようにしておくといいと思う。

　　２点目は、資料５－２の16ページに「５年相対生存率」について少し説明されている　　が、がんの専門家にとって生存率という言葉は非常にセンシティブである。生存率とい　　う言葉は出し方によっては非常に危険な数字をはらむことがあり、公表には常に細心の　　注意を払ってきた。相対生存率の「相対」とは何か、単純な生存率と言えない理由があ　　るのだろうか、といったことをがんを専門にしない教員に豆知識として伝えたり、「実測　　生存率」等を用いるなど、生存率という言葉についてもう少し説明を加えるべきである。

　３点目は、29ページの「データに関する注意」の中に「神奈川県立がんセンターが実施　　した調査」とあるが、この調査とは何か。

（事務局）

　　地域がん登録を指している。

（片山委員）

　　では、これは調査ではなく事業なので誤解を招くと思う。がん対策推進計画の中に、　　がん登録の推進という言葉も盛り込まれているので、ここにはがん登録という言葉も実　　際に入れたほうが、中学生にとってもメリットがあると思う。もともと日本にがん登録　　という法律がなく、地域でボランタリーでやってきたということや、地域がん登録がい　　つから始まって、どのような仕組みなのか、また、いよいよ法制化されるというような　　ことも、触れてもいいのではないか。

（中川座長）

　　豆知識的なものというのは、とても良いと思う。また豆知識はもっとあってもいいか　　もしれない。例えば内閣府の調査でも、国民が暮らしの中でがんを避けるために一番や　　っていることとして「焦げを食べない」ということがあるが、実際には誤っているとい　　うことや、日光を浴びすぎるのもいけないというが、少しは浴びたほうががんは少ない　　ということなどがある。このような誤解を解いてあげるなど、子どもに馴染みやすいこ　　とを取り入れていくと先生も話がしやすいのではないか。

　　また、３ページ目にある授業の構成の部分だが、事務局からご指摘があったように、　　国もどういう形態でやるのか、保健体育でやるのか、道徳や総合学習でやるのかといっ　　たことも全く決まっていない。その中で構成要素を提示して、それを先生方が工夫しや　　すいように活用例を示すのはとても良いと思う。パワーポイントはホームページからダ　　ウンロードできるようにするのがいいと思う。ホームページにアップすれば神奈川県以　　外の人も活用することになると思うので、神奈川の主張や神奈川が引っ張っていったと　　いうエビデンスを作っていただければと思う。

　事務局からも説明があったが、今年度については３回のモデル授業の講義を、神奈川　　版パワーポイント教材とその補助資料及び対がん協会のＤＶＤを利用しながら、私が実　　施させていただく。また、がん体験者の体験談については、緒方委員にお願いしている。　　緒方委員、よろしくお願いする。

　　さて、「がん教育教材の完成」は、今年度の大きな目標となっている。ぜひ、委員の皆　　様には、モデル授業３回のうち、いずれか1回以上は参加していただいて、実際の授業　　場面をご覧いただき、ご意見いただければと思う。また、モデル授業当日は、終了後、　　授業見学者を交えての「意見交換会」を予定している。現場の先生方から率直な感想や　　意見をいただいて、がん教育の今後の在り方について協議していくための参考にさせて　　いただきたい。

　　このパワーポイント、補助資料については以上だが、ご意見はいかがか。

（緒方委員）

　　私はがんの経験者であり、がん患者の家族でもあるが、そのことを無駄にしないた　　めにもお役に立てることをありがたいと思っている。この事業が発展していく上で、私　　のような役割を担う人がどんどん増えないといけないと思う。がんの経験をした人で、　　ボランティアの気持ちで、中川先生のような立場の方とともに、体験談を話すというよ　　うな方を、このモデル授業に参加することをお許しいただきたいが、いかがか。

（中川座長）

　　ぜひ来ていただきたい。

　仮に多くの経験者の方に体験談を話していただくということになれば、トレー　　　　　ニングとまではいかなくても、一定のガイドライン的なものが必要だと思う。検討して　　いただきたい。

　　他にいかがか。

（田中副座長）

　　関連して、来年度以降のことになるが、基本的には学校で、教員ががん教育を進めて　　いくわけなので、教員が学校で教えられるようになることを目標にしている。したがっ　　て、今回の３回のモデル授業は、近隣の学校の教員に参加していただきたいと考え、ご　　案内させていただいている。後ほど事務局からも報告があるかもしれないが、現段階で　　各回30人ほど申し込みをいただいている。来年は現場の先生方にモデル授業をやってい　　ただき、最終的に全ての学校でがん教育を行うというように進めていきたいと計画して　　いる。

（中川座長）

　　素晴らしい。

**４　その他**

　事務局より事務連絡

（中川座長）

　　私から１点お願いだが、資料４のアンケートについて、もし可能であれば生徒には授　　業の前後、それから半年後にもアンケートをとれないか。授業の直後にイメージが変わ　　るのは当たり前で、半年後や１年後の結果が、本当の意味での教育効果である。検討を　　お願いしたい。

　　それでは、第１回の協議会を終了する。

**５　閉会**